

【ニュースレター】

第53号

教室での演奏は「一期一会」



～ヴァイオリニスト・渡辺玲子さんにインタビュー～

今年度最後のニュースレターは世界的ヴァイオリニスト渡辺玲子さんに「子どもに音楽を」の活動について伺いました。渡辺さんには2008年から多くの演奏活動に協力頂いています。

(聞き手は当NPOの徳永扶美子理事長です。以下、敬称略)

徳永:これまで渡辺さんには子ども達への演奏会に度々出演頂いてきましたが、どの様な感想をお持ちですか？

渡辺:場所によってレスポンスが違います。反応が良かったり、いまいちだったり・・・当日、初めて子どもたちと顔合わせをするので当然です。どういうレベルで音楽にかかわりたいと思っているのか分からないので、演奏のリアクションはその場での一期一会です。

徳永:これまで演奏曲目は子どもが知っているポピュラーな曲というより、演奏家が子ども達に聴いて欲しいという曲を大切にしたいと考えてきました。演奏家を信じ、その曲を弾いて頂く。大人が難しいと感じる曲でも、子ども達は演奏家の集中力に引き込まれ、自分たちの知らない世界が目の前にある！という反応をしていました。

渡辺:演奏家の弾きたいものを演奏するという姿勢を貫いているのは重要な事です。これまで様々な曲を弾いていますが、手加減せずに通常の演奏会と同じで思いっきり弾く感じの曲を選びます。毎回プログラムを変えるより、ポイントをキープして組み立てるようにしています。

徳永:対象の学年については？中学生は感動だけで終わらず、受け取った思いを自分の明日に繋げようとしています。

渡辺:自分に照らし合わせて相互的になっているのですね。演奏家がこれまでどういう事をやってきたのか、どういう生き方をしたのか、そういう部分を伝えることも大事かもしれません。私は「音楽は癒し」だとは思いません。音楽

は「生きる姿勢」だと感じています。

徳永:子ども達が相手という事で通常の演奏会と違うところ、気をつけているところはありますか？

渡辺:全く同じです。これまでの活動で唯一反省するのは幼稚園でバッハの「シャコンヌ」を弾いたことですね。弾いた瞬間、最前列の一人の子どもが泣きだしてしまい、経験を積んだ今、振り返るとくそれは泣いて当然だったなと。

徳永:演奏の迫りにびっくりしていました。感情表現のひとつですね。

渡辺:去年6月の被災地での活動、陸前高田市で全校児童を対象にした演奏会で、一番前にいた特別支援学級の小さな子ども達がラベル「ツィガーヌ」を弾いた時、本当に楽しそうに踊っていたことがとても嬉しく印象に残りました。いまだに校庭に仮設住宅が残る中で子ども達が本当に元気だったことが私にとっても気持ちの救いになりました。

徳永:音楽に合わせて体が動くというのは原点ですね。

最後に今後の「子どもに音楽を」の活動について一言。

渡辺:「子どもに音楽を」の素晴らしいところはアウトリーチビジネスではなく、それぞれのアーティストが子ども達の前でプロフェッショナルとして本気の演奏、本気の姿勢をさらけだせるところにあると思っています。ぜひ、このことを続けていただきたいと思います。

徳永:今日は貴重なお話を有り難うございました。

(2017年12月11日)

平成30年度通常総会は5月19日(土)15時～ ムジクピアフォーラム
ミニコンサート出演者は Vn.渡辺玲子さん P.小森谷裕子さん

★今年度の活動は30ヶ所で行いましたが、2月27日の目黒区立碑小学校で無事終了いたしました。皆さまには大変お世話になりました。来年度もどうぞよろしくお願いいたします。